

【翻 訳】

訳詩集 現代イスラエルの詩人たち

— Ada Aharoni, Eva Shaltiel,  
Luiza Carol, Bella Vernikova —

矢 口 以 文

Ada Aharoni

汚 ・ 染

小鳥を見て  
小鳥 と言うと  
彼らは小鳥と言う

その歌声を聞いて  
歌声 と言うと  
彼らは歌声と言う

しかし爆弾を見て  
爆弾 と言うと  
彼らは「平和を作り出すもの」と言う

核汚染を見て  
放射線 と言うと  
彼らはエネルギーと言う

核汚染を見て  
核による大量虐殺 と言うと  
彼らは戦争抑止と言う

## 戦争をどのようにして殺すか

戦争よ お前を殺したいのだが  
その方法が分からない  
世界中の人たちがなぜ  
手をつないで  
最大の殺人者である  
戦争のお前を殺さないのか  
分からない

世界中の政治家たちが  
目をくもらせながら  
お前の太った腹に  
新鮮な兵たちと  
核兵器を食わせる  
彼らの知っているのはひとりか  
ふたりの殺人者を絞首刑にする方法だけだ  
しかしお前ではない —  
最大の殺人者のお前ではない

大虐殺のあと司祭は言った  
「私たちに責任がある」と  
大虐殺のあとイスラムの指導者は言った  
「私たちはずっと兄弟でいよう」と  
大虐殺のあとラビは言った  
「もしそうしようとすれば止められる」と  
司祭もシェークもラビも  
手をあげて空を見上げる

平和の行進者たちが  
「死にたくない 生きたい」

と刻まれた  
大理石の厚板を持って  
ぴゅうぴゅう飛ぶ弾丸の下を運ぶ  
まだ暖かい  
死体のように

### もう博物館にはいない

あなたの愛撫で  
ミイラにされた私は  
蛇神のゾンビーだった  
古代の石棺の中で  
ほうたいを巻かれたミイラだった  
何世紀もの間忍耐強く待っていた  
あなたがひまをみつけて  
ふたを開けにきてくれるのを

しかしもう待たない  
私は生きかえった —  
もう蛇神のミイラ  
ではない  
古いかびくさい  
ほうたいを  
ほどく時間だ  
ふたを広く開いて  
枝にたわわな  
ざくろを求めて  
大地をもう一度踏みしめる時間だ

私はあなたの  
博物館には

もういない

## 平和の橋

「人はそれぞれぶどうの木の下  
いちじくの木の下に座り  
脅かすものは何もないと  
万軍の主の口が語られた」(ミカ書4・4)

私のアラブの姉妹  
対イスラエル抵抗闘争の  
煮えたぎる苦痛の上に  
あなたのいちじくとぶとうから私のいちじくとぶとうへ  
奇蹟の橋をかけよう  
タグリッド アラブの姉妹よ  
息子たちの投げる石のために  
嘆くのを止めて  
二人の女性らしく  
もう一度笑い合うのはいつのことか

タグリッド 私の友よ  
あなたの文化から私の文化へ  
私の文化からあなたの文化へ  
あなたと私がかかる奇蹟の橋の上で  
咲きほころぶジャスミンの香りをあびて  
手を取り合い  
囁き合うのだ 私たちの愛について  
子供たち 両親 これからの計画について  
きらめく平和な星で一杯の  
輝やく自由な空に対する  
私たちの深い深い憧れについて

銀色の地平線に花咲く  
ぶどうといちじくの木々の下で  
私はあなたの抑圧者になりたくない  
あなたは私の抑圧者になりたくない  
あなたの看守になりたくない 私の看守になりたくない  
互に脅かすものになりたくない  
子供たちが石で 弾丸で スカッドミサイルで  
傷つけ合い 血を流し合ってはいるけれど――

だから アラブの姉妹よ  
強い平和の橋を作ろう  
ぶどうといちじくの木の下に  
自分たちの子供と一緒に座ろう  
子供たちを脅かすものは何もないように

## Eva Shaltiel

### 聖なる都

ここに住んで  
光を浴び  
ちりと泥とを嘆き  
木と緑のものを  
喜こぶ。

古代の石にさわり  
力と誇りと謙そんとを  
順番に引き出す――  
景色は私たちに美を与え  
私たちは平和のために祈る。

この都を世界の

聖なるものにしたのは何なのか。

脈打つ春なのか  
父祖たちの建てた  
宮殿なのか  
聖なる箱船をいれるために  
彼らを買った  
脱穀場なのか  
聖なる岩に建てられた  
素晴らしい神殿なのか。

同胞はそれのために戦い  
勝ち取っては  
敗れ また勝ち取って  
新らしく建ててはまた敗れたのだ  
そして伝えられてはいない悲慘を味わった。  
私たちは再び戦い  
敗れ それから勝った。

今ここに住み  
光りを浴び  
建てながら ちりと戦っている。  
侵害者たちも  
やってきては  
戦い 勝ち 敗れ 建てて  
その岩を欲しがった そして  
今も尚その夢を見る — そのことなのだ 戦争に狩り立てるのは —  
それでは聖なるものとは何なのか —  
平和の敷地とは何なのか。

石ではない 光ではない  
建物ではない 王ではない  
記憶でさえない。

それは霊だ  
その霊は あなたの隣り人を  
あなたのように愛し  
正義と  
真実のうちに  
心を開き慈悲をもって  
争わず生きなさい  
と教えた預言者たちの  
知っていた言葉を  
よみがえらせたのだ。  
エルサレム。

## 過 剰

アーモンドの木が一本だけ  
庭か雑木林か  
かえりみられずに古くなった  
果樹園で  
咲いているのは  
喜びだ、  
それは美であり  
詩的なインスピレーションだ。

しかし農場に集められ列になって  
何百も  
立っていると、  
それらのあわいピンクの  
美しさが  
バレエ団の魅力を  
ひきたたせることはほとんどない、  
目指すものは

果実だけだから。

## 老 人

初めて知った時  
彼は隣人の夫だった、  
遊び仲間の父だった、  
遠い存在で 背が高くて 良い顔立ちをし  
北欧的な鼻を持っていた。それから  
彼は褐色の軍服を着て  
ベルトを締め ピストルの革袋を持ち 軍帽をかぶり 短剣を帯び  
人々の眼を引きつけ 恐れをかきたてた。  
残酷な弾圧をする軍隊の  
一員だった。

私たちは離れたところへ移った。  
私は成長して同胞の世界に入り、  
脅かされたが、その  
脅威から逃れて  
新しく建設し できるものは何でも  
利用しようとする決心と  
団結によって強められた。

再び会った時  
世界は変っていた。  
生き残った私たちもまた  
打ち勝ち、打ち破った。  
そして彼は老いた。

今話そうとするが  
できない。

なぜなら彼があ  
最悪の時代に  
やったこと、やったかもしれないこと、  
考えたこと、感じたことについては  
暗い空虚があるのだから。  
そしてその暗やみ以上に、  
それらすべてを何も言わずに  
置き去りにする  
必要があるのだ。

### ドイツの夏

そこにもう一度行った時  
私は憎悪と嫌悪  
そのものであり  
それで身をかためていた。  
しかしそばまでやってきて  
そこを恨むことも  
深く愛することも  
呪うことさえできないことに  
気がついた。

気楽に裕福に  
人々は暮らしている。  
山のような罪責も  
負うてはいないし、  
苦悩の割れ目への恐怖もない。  
彼らの目にうつるものは  
大地の山と  
寒い季節の暖をとるために掘る  
石炭のための

巨大なクレーターだ。  
恐れも後悔もなく  
村や森を根こそぎにしている。

非人道的な行為をした人々は  
今どこにいるのかと  
尋ねるなら、  
なんですって？  
ああ、別の町へ、  
老人ホームへ  
引っ越しました。  
あの人たちのことは知りません。  
私たちは若いんです、時代が変わったんです。

しかし小ざれいさは薄い皮だ。  
その下には非難と  
感傷的な鉄面皮が隠されている。  
「誰がああのトルコ人、  
アジア人、黒人が欲しいのか。  
いなくなればいいのだ。船で送りかえせ、  
俺たちのパンを食らいやがって！」  
これで変っただって？

## Luiza Carol

### ヘブライの言葉が蝶のように

ヘブライの言葉が蝶のように  
辞典の中に卵を産む

それからその醜い目の見えない幼虫たちが  
私の脳の中を這いまわり

ゆっくり 音もたてずに噛み  
色のないいやらしい体を肥え太らせる

とうとうそれらは忘却を身にまとして  
眠りに落ちる —  
半分死んで感覚を失ったさなぎたち  
そして長い または短い時間のあとで  
(どのくらいか分からない なぜって  
それらは予測し難い  
いやらしい生き物だから)  
それらがとび起きる  
時間がある 色と生命に  
酔ってきらきら輝やく蝶たち —

おお 私は驚いて息を止める  
はあはあ震える声を出す  
さわるのがこわい  
翼から  
繊細な魔力の粉を  
振り落としてしまわないかと思って

### 海岸でヘブライ語を学ぶ

言葉のひとつひとつは  
一滴の水のように色がない  
しかしこの言葉には全体として  
昔ながらのあらゆる海の色がある  
海草の匂いがある  
海の深みの静かな貝の匂いがある

その岸辺にふして

それを恐れている  
まだ泳ぎを知らないかのように

### 授 入 熱

ヘブライ語を話そうとすると  
私の言葉は流動性を失なう  
私の言葉は外国語になる  
    使いものにならなくなる  
        駄目になる  
授入熱におかされている  
私の中の母乳のように

### 悪 夢

落ちていった  
    落ちていった  
        落ちていった  
さかさまに  
    何も聞えず  
        何も言えず  
伝説の巨大な塔から  
炎と苦痛の中に崩れ落ちていった

みんな落ちていった  
さかさまに  
いろいろな言語の  
沈黙の中に失われた

何かにつかまろうとしたが

つかんだものはすべて  
沈黙と苦痛の中に  
崩れた  
誰かをつかまえようとしたが  
つかまえたものは皆  
沈黙と苦痛の中に  
崩れた

## 北の星

Roger White に

それらは暗い空に沈黙のサインで  
何の走り書きをしているのか  
私たちの霜と恐怖の  
夢の中で何を燃やしているのか

異邦の天のどんな音楽を  
書いているのか  
神秘の内に霞をつらぬいて  
それらは消える

## ルーマニヤの雪

子供時代の雪はどこへ行ったのか  
地中海岸での  
熱い年月の間 それはどこへ行ったのか  
永久になくなったと思っていた  
なつかしいルーマニヤの  
遠い

子供時代と一緒に葬られたと思っていた

しかし今夜はこんなにも深い沈黙なので  
昔の雪が  
私の無感覚になった身体の上に  
白くなった髪の上に軽やかに落ちてくるのが  
突然に聞こえてきた

今夜こんなにも深い沈黙なので  
緑がかった白い  
雪片の小さい若葉が  
時の毛布の下からやってくるのが聞こえた  
「今日は！」とそれらは言った  
「またやってきました  
あなたは忘れたでしょうが  
私たちは忘れていません  
覚えていますよ 少女のあなたが  
ルーマニヤの雪の中を走ったことを  
少し勇敢で 少しはにかんで  
男の子みたいだった  
弱くて  
ほっそりしていて  
質素で  
無邪気で  
不器用だった  
こわれ易い緑白色の考えが  
降りたての雪と戦っていた  
元気ですか」

空と時  
間の中に  
迷いこんで  
たっまし

狂った言葉の中に  
迷  
たっましでん  
込

ひくし  
淋  
ひとり  
で迷って  
たっま

## あの岩

あの岩は私よりも  
強そうだ 永久に存在しそうだ  
しかし私はみごもっている

## あのせきれい

午後遅く  
カーメル山のふもとの海辺を  
もう一度散策し  
あのせきれいとの会話を  
もう一度始めた  
「地理のことだが  
ダニープ平野は  
知らないようだね」と私は言った  
「私はそこで生まれました」とせきれいは言った  
「あなたと同じです  
子供時代の巣がそこから  
私の夢の中に入ったのです  
あなたの場合と同じです

ところで  
あなたも渡り鳥ですか」  
「なんと言ったら良いか分かりません  
一生に一度だけ移る人を  
渡り鳥と言えるのかしら」と私は言った  
「しかし考え方はどうですか  
考えも一生に一度移るのですか」  
「いいえ！」と答えた  
「私の考えは渡り鳥のサイクルの  
リズムを持っています  
私の一生にも  
多くの渡り鳥のサイクルがあります」

### 誰かの詩を訳す

それは誰かほかの人の子供たちを愛するのに似ている  
二番目の奥さんになりたい  
と思っている人の子供たちを一

小さい子供たちではない  
大人になった子供たちだ

あなたは額を愛し始める  
目を 微笑みを 手を愛し始める  
自分のものにしたいが  
できない

あなたには分からない彼らのあの初めての泣き声を伝える  
古い写真や物語をみんな愛する  
あなたには分からない あなたには分からない  
彼らが初めて歩いて 初めて突き当たったこと

あなたには分からない あなたには分からない  
彼らの初めての歯 初めての流感  
初めての涙 初めての愛 初めての片意地

彼らがあなたに似てほしいと望めばそれだけあなたが彼らに似始める

彼らを愛すればそれだけ  
彼らがあなたを必要としないことを感じる

## 角 膜

言語が好き。  
言語について詩を書くのが好き。  
そんな詩はたくさん書いた。  
アリババの洞窟に隠された  
宝石のような言葉で一杯の  
きらめく言語、目をかすませる魔法の  
蒸留酒のように めまいをさせる言語、  
古酒の芳香を放って  
書斎に出没する消えた言語、  
春の花のような言葉の新鮮な言語、  
湯気のたっている茶のような熱い言語、  
まばたきさせる  
氷のような言葉のある冷たい言語、  
山の急流のような威勢のよい言語、  
神秘的な海のように深い言語、  
明るい言語、  
霧のかかった言語、  
雪の多い 風の吹く 雨の多い言語……

とりわけ 故郷の言語について書く、

あの魅力あるヘブライ語、  
十字架につけられてよみがえった私たちの言語、  
奇蹟のそよ風のように  
目、鼻、皮膚から毎日  
私の中にしみこんできて  
血球に溶けこむ言語について —

しかし育った国の言語である  
ルーマニア語については何も話さなかった。

それは角膜のようなもの。  
人は普通 自分の外や中の  
見たものについて書く。  
自分の透明な  
色のない角膜については書かない、  
それは外にあるものでないし  
中にあるものでもない、  
それはただそこにあるのだ。

## Bella Vernikova

### ラトビア川での休日

17年。このビーチテント、このカヌー、  
少女たちの笑い声。おだやかな夏の午後、  
草の生えた砂でふちどられた岸辺。少年たちの  
肩が並んでいる — 子供時代の優しいきらめきが  
まだ彼らの上にある。ラトビア川よ、滑れ。

この世の争いを終りにせよ。この川に  
都市のごみを捨てさせるな。ここに横たわり  
ブロッホを読んでいる息子 —

男らしく成長した息子のベルトの下を時が打つことのないように。

思いは願いと離れて生きる。この流れに乗る  
カヌーの上で私は思い出に会う —  
平和と承認を与える終りない夕暮の中で  
私たち二人は動く。ラトビア川よ、滑れ。

## 都 市

男を愛する仕方  
都市を愛するようになるのは可能なことだ。  
ここにあらゆるものが集められる —  
今生きているものたち かつて生きていたものたち  
建物 話し言葉 心の形態  
涼しくなった静かな通りに漂う  
暮方の海の匂い — そこで私たちは  
風に吹き寄せられたかのように自分の時を生きている。  
なぜこのように感じるのか。多分  
見慣れた壁の涼しい存在 おしゃべりな友達との  
完全で習慣的な情景  
何世代にも渡って築きあげられたように見える  
人と空間に対する愛着のためだ。そうだ  
人生は終るから 慰めることはできない。しかしここでは  
私たちが通りすぎる時 都市はどこまでも続く。

## 夏のテーブルを囲んで

みんなが夏のテーブルを囲む。  
女たちは庭にサラダ いも  
ウォッカ 冷たい肉を運んだ。

男たちはぶどうやりんごのジュースを注ぐ、そして  
ランチを食べながら無邪気で生きのいいおしゃべりをする。  
自分の前のコップ パン その他のものを  
見る—ピュータリンや 穴の中から  
みつめている小動物のように非難をこめてではなく  
サマーハウスを訪れている友人のように。  
私は成長したから 彼らのように楽しく  
生きることができないことを責めはしない。  
私は自分をよそおう。私の盾は幸せな性格と  
思考の賜物だ。家族の誰も  
死んでいない。病気だったとしても  
夏風邪だ。だから誰よりも気楽に  
一日の仕事を終え苦労を忘れ 柔らかな雨を  
この庭に降らせる雲とは違う雲の中を飛んでいる。

### シニツキイの展覧会を見て

窓辺に立つ。食事の仕事は終わった。  
外は雪が降っている。静かな会話が  
新鮮な空気のようにこちらに流れてくる。  
人生の質素で 時としては苦い 深い交流が  
信頼の橋を作る。  
(そのように目を覚ますとまたすぐ  
私たちのロシア語が心の敬虔な思いを  
明らかにして 起床の時を告げるのだ)

昼休みがしのびより  
雪をかぶったドアを押し開ける。  
私たちは一時間の休みを歓迎する。辺り一面は  
雪だ。白い木 白いかん木の小さい森  
雪の上の動物の足跡。大風がないから雪は

美しくて長い白のひろがりを敷いた。それで  
私たちは南ロシアの静かな巨匠を見るため

美術館に向う、  
この画家は  
風景を描き続けた  
90歳の記念日を迎えたのだが  
展覧会の開催を  
待たずに死んだ。  
初期の習作（1915年代に描かれた  
風車のそばの小さな白い家）から  
現代（あのよく記憶されている  
暖かい入江のそばの赤さびた空っぽの海岸）まで—  
私たちは二つの画廊を見て  
芸術家の人生をたどった。彼の変らぬ  
情熱と輝やく色彩—  
まるで自信を持って知っているかのようだ  
自分のキャンバスが彼の愛したこれらのもろい物たちを保存し続けること  
に—  
時がこれらも彼も共々押し流してしまっても。

私たちは記念のために絵を選んだ。  
伴侶はオデッサの景色を、私は  
お茶のためのテーブルセットという静物。  
早い薄暮、窓が暗くなった。  
私たちはこの芸術家を実際に  
抱擁した気持ちになった—南ロシア派の最大の隠者。  
雲が燃えながら遠くへ去ってゆく  
空と海が溶け合っている  
その方へ私たちは動いていった。

注

Ada Aharoni 1933年カイロ生まれ。1950年イスラエルに移住。カイロを離れ、フランスに住み、その後イスラエルに移住したのだが、その間の苦難の状況が“Letter to Kadreya”に書かれている。第13回世界詩人会議議長。POEMS FROM ISRAELI and OTHER POEMS (Berger Press Publication, Israel 1992) から選んで訳した。

Eva Shaltiel 英文学と社会学を専攻。現在特殊教育に従事しながら、詩を書いている。詩集 KALEIDOSCOPE (Dosner & Sons LTD, Jerusalem 1985) から選んだ。

Luiza Carol ルーマニアに生まれ、1980年イスラエルに移住。母語はルーマニア語。成人してからヘブライ語を学んだ。ルーマニアに対しては愛憎の感情を持っているようだ。小詩集 SOS (ODLIA HADPASOT LTD, Israel 1992) から選んだ。「角膜」だけは A CANVAS OF POEMS から選んだ。

Bella Vernikova ロシアのオデッサ市に住んでいたが、1992年イスラエルに移住。ロシア語で書かれた詩集が英訳された。その THE POETRY OF BELLA VERNIKOVA (Hutton House of Long Island University) から選んだ。

## TRANSLATIONS

### Contemporary Jewish Poets

—Ada Aharoni, Eva Shaltiel,  
Luiza Carol, Bella Vernikova—

Yorifumi YAGUCHI

### The Letters of C. L. Dodgson to the House of Macmillan

Kumiko TAIRA